中坪遺跡（第３次）発掘調査 現地説明会資料

～松阪市立田町～

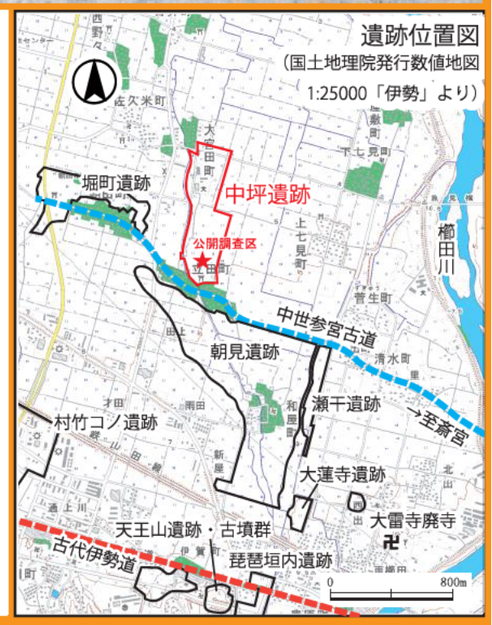
2017.10.15　三重県埋蔵文化財センター

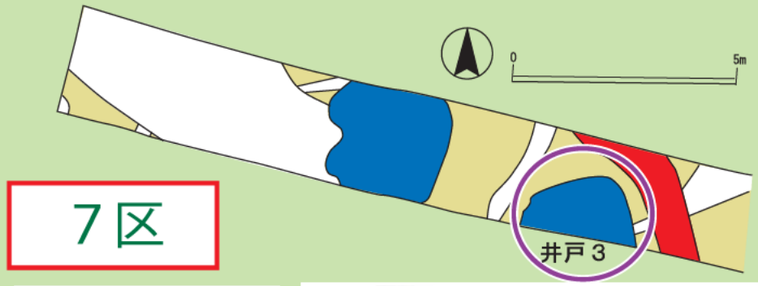
調査区９区で見つかった水利施設（北から）

奈良時代の水利施設が見つかりました

中坪遺跡は、条里型地割とよばれる古代以来の耕地区画が残る、櫛田川下流域の平野に営まれた縄文時代から江戸時代の遺跡です。三重県によるほ場整備工事に伴う平成 25・26 年度の調査では、建物跡や井戸、溝などが見つかっています。３回目の調査にあたる今回の調査でも、室町時代の建物跡や溝、井戸のほか、江戸時代の土坑などが見つかっています。

今回、奈良時代の水利施設が見つかりました。この水利施設は、木杭列や丸太で作られ、河川の本流から分流へと取水するために作られたと考えられます。こうした構造物は、すでに使用中に破損が進んだり、水に流されたりして、きれいに形が残ることは少ないものです。古代以前のものを含めても県内で数例しか確認されていないため、当時の土木技術や土地開発を考える上で、貴重な遺構となります。





井戸埋め戻し土から見つかった土器の出土状況

山茶椀の底には、墨で「○」のような記号が記されていました。

井戸埋め戻し土から見つかった多数の山茶椀（抜粋）

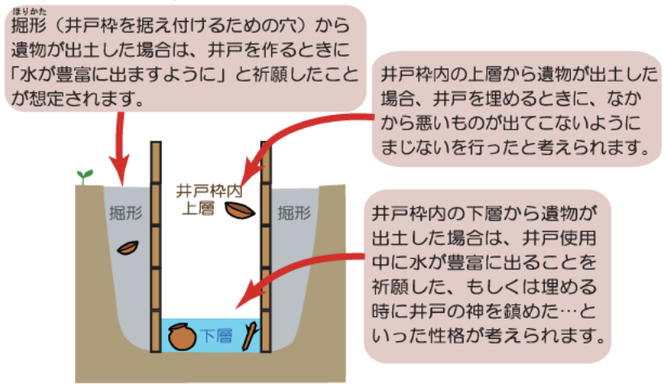
上の写真のさらに下から見つかった２つの鍋

この井戸には、多くの山茶椀や土師器の鍋などが埋められていました。特に注目したいのは、井戸埋め戻し土から見つかった２つの土師器の鍋（鎌倉時代）で、上下が逆さに据え付けられており、底は意図的に打ち欠かれていました。このような出土状況から、使わなくなった井戸を単なるゴミ捨て穴として利用したのではなく、井戸を廃棄する時に椀や鍋などを壊し、「井戸の神様」に捧げる祭祀が行われていたと考えられます。

水に祈る　～井戸の祭祀～

井戸や溝は、水を得るために欠かすことのできない大切な生活の一部でした。大切な場所であるがゆえに、神が宿る場所とされ、畏れられ祀られていました。中坪遺跡の周辺では、多くの井戸や溝が見つかっており、そのうちのいくつかの場所から祭祀（神まつり・まじない）の痕跡が見つかっています。

井戸に関わる祭祀は、弥生時代以降、現代まで続いています。祭祀を行うタイミングは、井戸を作るとき、井戸の使用中、井戸を埋めるときの大きく３つに分けられ、遺物の出土する位置や内容によって、祭祀の時期や性格が分かります。



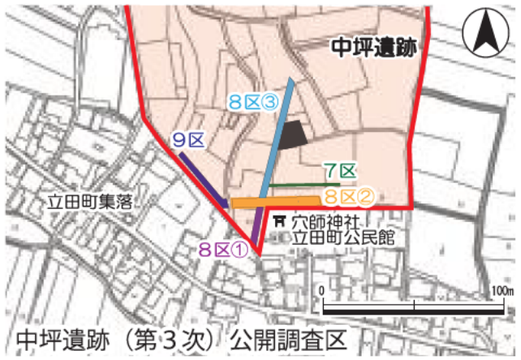
井戸の祭祀の時期や性格

まとめ

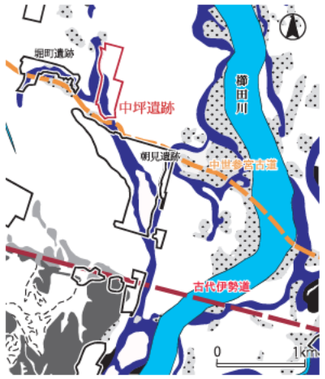
今回の中坪遺跡の調査でも、水利施設や溝、井戸など「水」に関係する施設を多く確認しました。櫛田川の氾濫災害を受ける一方で、水の恩恵も受けていたということが分かりました。当時の人々の工夫は脈々と現在まで受け継がれ、今も豊かに農作物を育てていることが、この土地にくらす人々と水との深い関係を示しているのではないでしょうか。

調査遺跡名：中坪遺跡（第３次）
所　在　地：三重県松阪市立田町
調査面積　：約 3,885 ㎡（予定）

原因事業名　：高度水利機能確保基盤整備事業（朝見上地区）
調査実施機関：三重県埋蔵文化財センター
調査期間　：平成 29 年 6 月 29 日～平成 29 年 12 月（予定）



中坪遺跡（第３次）公開調査区

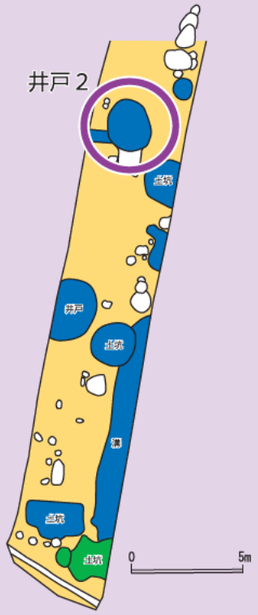


中坪遺跡周辺の地形分類図

国土地理院『治水地形分類図』2014 年更新版を参考

- 旧河道
- 自然堤防
- 山地
- 台地・段丘

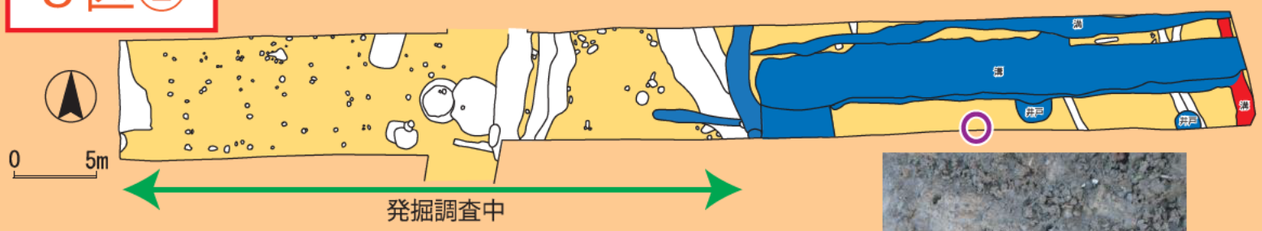
8区①



井戸２（結物井戸）長径 2.4m

調査区の北側で井戸２が見つかりました。井戸枠は、縦長の板を筒形に組んで竹製のタガで結った結物（ゆいもの）であることが分りました。補強のために、結物のまわりには瓦が３枚立てられていました。井戸枠内の埋土（まいど）から、戦国時代の鍋のかけらが出土しており、この時期に役目を終えたことが分かります。

8区②



磨製石斧（ませいせきふ）（縄文時代中～後期の石の斧（おの））

調査区の東側の中央には、幅約４ｍの鎌倉時代から室町時代にかけての溝が見つかりました。区画を示す溝であった可能性があります。また、縄文時代の磨製石斧（ませいせきふ）も見つかりました。通常、縄文時代の人たちは、山間部でくらすことが多いとされるのですが、この地のような沖積地（ちゅうせきち）にも生活の場を求めてやってきていたことが分かります。

今回の調査で出土した遺物

石匙（いしさじ）

万能ナイフとして使われたものと考えられます。【縄文時代後～晩期】

石鏃（せきぞく）（やじり）

有茎式石鏃に分類されますが、茎の部分が残念ながら折れています。【縄文時代晩期～弥生時代】

青磁（せいじ）（上：椀，下：香炉）

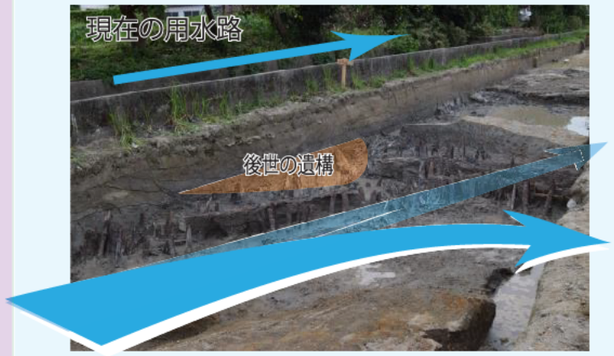
中国から輸入された高級品【鎌倉時代～室町時代】

土師器（はじき）　小皿

粘土を手づくねで成形し、素焼きしたもの。白い粘土でたいへんうすく作られています。【室町時代】

陶器（とうき）　擂鉢（すりばち）

瀬戸産の擂鉢。櫛（くし）状工具で付けた擂り目が特徴的です。【江戸時代】



水利施設の働き

水の勢いで斜めに傾いた木杭

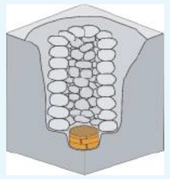
9区

調査区の中央部からは、河川跡に伴い、木杭列や丸太で作られた奈良時代の水利施設が見つかりました。木杭列は円弧を描いて２列に並び、横木を挟み込んでいました。また、丸太を４本並べて設置してある箇所も見られました。木杭の刺さっている砂層から奈良時代の土師器（はじき）や須恵器（すえき）が出土しており、奈良時代の施設であることが分かりました。

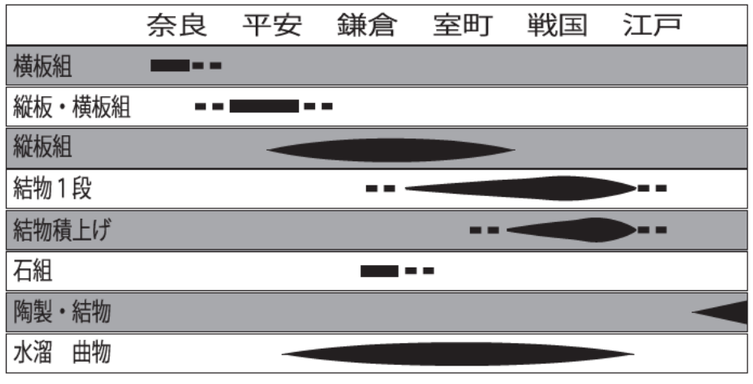
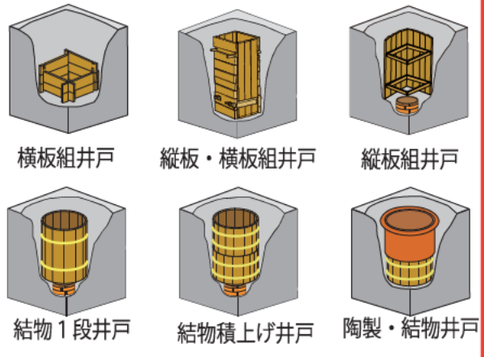
この施設は、河川の本流から水田方向へと分流させるための堰（せき）の機能を持っていたと考えられます。多くの水を取り込んでいたことは木杭の多さが物語っており、木杭が斜めになっているのは、水の勢いで徐々に傾いたものと考えられます。

なお、この辺り一帯は、櫛田川の氾濫（はんらん）が起きていた場所で、古い河川の跡を複数認められます（地形分類図参照）。こうした堰を設置して水田への供給を安定させようとした昔の人たちの工夫や苦労をうかがい知ることができます。

井戸１（石組井戸）



断面模式図

穴師（あなし）神社の西、用水路のすぐ脇から内径 70cm ほどの石組井戸が見つかりました。20～30cm の平たい石を積み重ねて作られた井戸で、朝見上地区ではこうした石組井戸が主に鎌倉時代に作られていたことがこれまでの調査で分かっています。この井戸枠内の埋土から室町時代の土器片が見つかっており、この時期に役目を終えたことが分かります。

これまでに発掘調査で明らかになった 朝見上地区（立田町・朝田町・和屋町・幸生町・上七見町・上川町）の井戸の変遷